

運営に関わって

## 大西 政義

大阪大学産業科学研究所  
技術室 計測班 班長

おおにし・まさよし／

1983年4月1日付で、大阪大学産業科学研究所技術室工作班機械回路工作掛（公務員当時の職名、現在は同係）に文部技官として採用され、試作工場機械加工室に配属されました。専門職員、係長、工作班長を経て2016年4月1日付で現職を拝命しました。33年間、試作工場機械加工室で研究支援に取り組んでおります。法人化後は、通常業務に加えて、事業場安全衛生委員会委員の業務やPCB管理業務のアシスト等を行っています。



2015年4月から分子研装置開発室の運営委員会委員を務めさせて頂きました。きっかけは、2015年3月19日から20日に開催された装置開発室の「微細加工に関する技術サロン会」に参加させて頂いたことです。その時に飯野先生（以前阪大産研におられました）や、山本装置開発室長、鈴木技術課長、青山班長と交流を深めさせて頂き、そのご縁で山本室長から装置開発室運営委員会委員委嘱の依頼があり、若輩者ではございますがお引き受けした次第です。運営委員会出席や装置開発室施設利用申請の審査により、勤務地とは全く環境の違う研究機関で、共同利用機関としての在り方を学ばせて頂きました。私自身、これまで分子研の技術職員の方々との深い交流はございませんでしたが、記憶を辿りますと分子研技術課主催の技術研究会には第12回（1986年3月19～20日）から参加させて頂いております。その頃から国内の大学や研究機関等の技術職員同士が、研究・教育支援を行う上で必要な技術開発やその過程での問題解決等について熱く討論されておりました。その中でも思い出深いのは、第16回（2000年3月2～3日）に開催された技術研究会です。たしか岡崎国立共同研究機構に岡崎コンファレンスセンターが建設されて初めての開催だったと記憶しておりますが、第3分科会（極低温技術）や第4分科会（計算機技術）での討論会が会場に座りきれずに立ち見が出るほどの熱い盛り上がりを見せていたの

が印象的でした。また、青山機器開発技術班長が当時名古屋大学工学部におられて、圧電アクチュエータを用いた誤差補正切削システムの製作について発表しておられました。その青山班長が、現在JAXAに出向しておられ、短期であっても外の機関に出られる体制づくりがなされているところに分子研のアクティビティを感じますし、改めて人材マネジメントの重要性も感じました。

装置開発室では、所内外研究者による製作／工作依頼への対応と施設利用の推進、ナノプラットフォーム事業・アウトリーチ活動等への参加、最新技術情報の収集、室員自らの技術力向上を目指した自主的な技術開発等を行われておりますが、昔から上記の事柄すべてに対応されていたわけではなく、これまでに培ってきた技術に加え、新たな要望やその時代に必要となってきたニーズに少しずつ応える方向で進んでこられました。その間には、ガラス加工の支援停止や微細加工分野の設立等、その時代時代に必要な選択をされてこられたと思います。今後は、従来のコアな支援技術を枯らさずに、継続して人材を確保し育成することのできる環境整備（工作機械・計測機器類等の計画的更新も含む）と新技術の獲得を行う事が重要だと感じておりました。そんな折、今年度の運営委員会で装置開発室のミッションステートメントが作成されたのは、大変意義のあることだと思います。また、これを実践して

いくためには室員個々が明確なビジョンの元、モチベーションを維持し専門技術の錬磨と発展性のある仕事にチャレンジすることで、魅力あるバリューを提供していくことができると思います。私達も、分子研技術職員の方々との交流を深め、人事交流等を行う事ができればと考えています。分子研が、大学にはできない人材マネジメントの拠点として、ユーザーである教員やそれを支援する技術職員共々のハブとして今後も機能することを期待します。「これからの時代は、純粋に技術的なことからシミュレーションの精度向上や、国際的なものづくりの水平分業といった少し別次元の変化まで、常に世の中の動きを注視しつつ、研究所の方向性に適した解決策を提供できるようにしていきたい。」と山本室長も2014年の装置開発室レポートに書かれていましたが、変わらぬ部分と変えていかなければならない部分をしっかりと見極めて支援しなければならないと思います。